

『銀河英雄伝説』に学ぶ視点の複数性と、民主主義への批判と擁護

嶋崎 史崇、SHIMAZAKI Fumitaka (MLA+研究所)

1980 年代に一世を風靡した田中芳樹の長編 SF 小説『銀河英雄伝説』。2019 年からは多田俊介による新アニメ版が劇場上映・テレビ放送され、藤崎竜の漫画版も 30 巻に達している。

遙かな未来において、民主主義を掲げるが深刻な腐敗と衆愚政治に陥った「自由惑星同盟」と、体制変革を経て民衆のための清廉な専制政治を行うに至った「銀河帝国」との宇宙戦争を描く架空戦記である。だがもう一つの主題は政治であり、「民主主義の教科書」という評価すらある（『朝日新聞』2019 年 11 月 4 日付「文化の扉」）。

私がこの作品で最も高く評価しているのは、対立する両陣営の軍隊で、それぞれ主人公格の将軍が置かれ、著者がどちらかに肩入れすることなく、複眼的な歴史記述が試みられていることだ。また、選挙のための人気取りを目的とする先制攻撃、無用な挑発による戦争誘発、非戦闘員の虐殺といった、民主国家側の巨悪も容赦なく見せつける、という民主主義批判にもなっている。

そうした腐敗した政治の結果、同盟側は、軍事・政治（経済）の両方を「常勝の天才」ラインハルト・フォン・ローエングラム（以下ラ）が啓蒙専制君主として司り、公平な統治を行うようになった帝国の新体制に敗北し、滅亡を迎える。帝国の新体制は政治学者の杉浦功一により、インプット（政治参加）は非民主的だが、アウトプット（政策）は民主的（腐敗を撲滅し国民の利益に適う）であろう、と分析されている（『「銀河英雄伝説」に学ぶ政治学』亜紀書房、2019 年、76 頁以下）。墮落した旧帝国を刷新した新体制への民衆の支持は、皮肉にも、民主的に選ばれた同盟政府への有権者の支持を遥かに凌ぐほどである。

文民統制は民主制の基本であるが、「不敗の魔術師」と謳われる同盟側の主人公、ヤン・ウェンリーは民主政治家らの命令に従い、頼まれもしない他国民の「解放」を大義名分とした事実上の侵

略戦争や、自己保身のため勝利寸前での停戦を命じられる等、苦勞の連続を経験する。

ところが同盟側は、国家が実質的に滅亡してから、本領を発揮するといえる。ヤンらは、ラ個人の才能を認めながらも、将来の指導者らも清廉である可能性は低いと考え、人類社会に民主主義の火種を絶やさないという目標を立てる。この目的のため一部の政治家と連携し、たった一つの艦隊を率いて、圧倒的に不利な抵抗を続ける。「最悪の民主政治でも、最良の専制政治にまさる」（原作小説創元 SF 文庫版＝以下同、第 5 巻、249 頁）、「専制君主の善政というものは、人間の政治意識にとってもっとも甘美な麻薬」（第 6 巻、114 頁）といった洞察が、ヤンを突き動かしている。

驚くべきは、絶対的カリスマであるヤンが、第三勢力により暗殺された後も、後継者らが戦いを続けることだ。この展開は、特定の優れた指導者に依存するのではなく、市民一人一人に主権者、あるいは主人公＝英雄（hero）としての責任の自覚を求める、民主主義理念の力の発露として評価できる。「英雄や偉人が存在する必要をなくするための制度が民主共和制」（第 3 巻、163 頁）という著者の理解が根底にある。B・ブレヒトによる「英雄がいなく国が不幸」なのではなく「英雄を必要とする国が不幸」という洞察を思い出しておきたい（『ガリレイの生涯』第 13 幕参照）。第 6 巻 197 頁には「英雄崇拜菌」という言葉もある。他方で帝国は、臣下らは理念ではなく皇帝個人に従属しているため、皇帝がいなくなれば直ちに瓦解するであろう脆弱な体制として描写されている。最終的には、多大な犠牲を払いつつ、新帝国内の一角に民主制の自治領の成立が認められる、という結末を迎える。

私が本作に注目する理由の一つは、拙著『ウクライナ・コロナワクチン報道にみるメディア危機』（本の泉社、2023 年）で、本作新アニメ版上

映期間と重なる時期に進行しているウクライナ戦争を論じたことだ。この著作で私は、欧米の政府および主要メディアの見方を、ほぼ一方的かつ無批判に拡散した日本の主要メディアの姿勢を、次のような論点に即して批判した。

- ・2014年のウクライナの「マイダン革命」の実態は、米国が支援した武装クーデター
- ・特にロシア系住民が多く犠牲になったドンバス地方での内戦を終結させるための「ミンスク合意」を、西側はウクライナ軍増強の「時間稼ぎ」として利用したとドイツのメルケル元首相が告白
- ・西側によるウクライナへの新自由主義的改革の押し付け、および伝統的な中立政策から NATO 加盟への方針転換促進
- ・反ロシア色の強いウクライナの好戦的民族主義勢力への米国の支援と扇動
- ・ブチャ虐殺事件がロシア軍の仕業でない可能性（櫻井春彦、寺島隆吉らによる検証）
- ・戦争勃発後のボリス・ジョンソン元英国首相による停戦妨害工作
- ・欧州とロシアを結ぶガスパイプライン・ノルドストリーム爆破事件に米国が関与したという指摘（シーモア・ハーシュの調査報道による）

一般の報道とは正反対だが、米国と同盟国が先行してウクライナの主権を侵害し、戦争を強制的に引き起こし、しかも継続を望んでいるという見方が、相当な根拠を伴って可能である。こういった観点は大多数の日本人にはあまり知られていないと思われるが、安斎育郎、遠藤誉、大崎巖、塩原俊彦、寺島隆吉、松里公孝といった有識者らの著書と、根拠として参照されている1次資料も含めて繙いて、主体的に判断してほしい。

そもそも私は一濡れ衣の疑いも多いとはいえーロシア側の戦争行為を正当化したいわけではないし、ラの建国した公正な新帝国に重ねたいわけでもない。しかし、自由民主主義の盟主を自称する米国の「リベラルな覇権主義」（ジョン・ミアシャイマー）もしくは「ネオコン」の攻撃的な外交政策を批判するためには、それぞれの出来事を両面から見る視点の複数性は不可欠だ（「宣教師

然」として、政権転覆を伴う「民主主義の輸出」を試みてきたリベラルな覇権主義の解説として、塩原俊彦『帝国主義アメリカの野望』社会評論社、2024年、第6章を参照）。

以上を踏まえて注意を促したいのは、本作が決して戦争を賛美する趣旨ではないことだ。民衆の直接的犠牲の他、英雄の手柄の陰での無数の無名兵士の死が描かれる。莫大な戦費負担による経済の疲弊と社会の荒廃も描写されている。人類で最も戦争上手なヤンは、同時に誰よりも戦争を嫌い、常に早期の退役を望みながら、ひとえに平和を希求する人物でもある、という絶妙な設定も有効だ。彼は常に敵国の民衆を含む人類全体の利益に思いを馳せ、自らが大量殺人者であることに苦悩している。残忍ではないが生粋の軍人として戦うことを好み、権力志向のラと対照的に、貧しさ故に歴史学研究を諦め、軍人の道に引き込まれたのがヤンでもある。国家の存亡は「個人の自由と権利に比べれば、たいした価値のあるものじゃない」（第2巻、176頁）、という彼の作中屈指の名言がある。この言葉には、現実存在する腐敗した民主国家たる祖国のために死ぬことを賛美するといった発想とは程遠いが、自由民主主義の掲げる理念は尊く守るに値する、という思想が表れている（「国家が個人を犠牲にしにくい社会体制には、志向する価値があるように思えた」＝第6巻、323頁＝という言葉も注目に値する）。

このような事情に鑑み、ヤンらの戦闘による民主制の擁護を、比喩として受け止めることを提案する。現実の民主社会にあって、主権者としての責任を果たす闘いの舞台は、複数の視点に依拠する言論・政治活動である、と主張したい。

「政治は、それを蔑視した者にたいして、必ず復讐するのだ」（第10巻、342頁）という本作の結論的警句がある。この警句は、低投票率に苛まれ、ウクライナ問題・コロナワクチン薬害問題のような重要課題について、複眼的思考を好まない世相にも、向けられているといえよう。

ペーパーマリオ RPG におけるトランスジェンダー表象の変化

「オトコのコ」から「トランスジェンダー女性」へ

1. 『ペーパーマリオ RPG』の物語について

『ペーパーマリオ RPG』は、ニンテンドーの人気キャラクター「スーパーマリオブラザーズ」のマリオと物語途中で出会う 7 名の仲間たちが主人公のロールプレイングゲームである。本作は 9 つのステージを章立てにして物語が進行していく。ある日、マリオのもとにピーチ姫から「宝探しを手伝ってほしいからゴロツキタウンという港街へ来てほしい」という内容の手紙と宝の地図が送られてくる。マリオがゴロツキタウンへ到着すると、クリスチーナという大学生が悪の組織の集団に襲われそうになっている場面に出くわしてしまう。マリオはクリスチーナを助け、宝を探しにゴロツキタウンへ来たことを説明する。その最中、この 2 人はピーチ姫の付き人と遭遇し、ピーチ姫が宝探しの途中で行方不明になってしまったことを知る。ピーチ姫と宝を探し出すため、マリオとクリスチーナは仲間になり、冒険が始まる。これが物語の冒頭であり、各ステージでは概ねこのような流れで、徐々に仲間が増え、物語が進行していく。2004 年に発売されたゲームキューブ版（以降 α 版）と 2024 年にリメイクとして発売された Switch 版（以降 β 版）との変更点を比較しつつ、2004 年当時、海外に向けて翻訳された外国語版の改変も参考にしながら、4 人目の仲間であるビビアンについて考察し、多様性への「寛容」が高まった現代におけるゲーム企業の、セクシュアルマイノリティに対する理解について再考したい。

2. α 版ビビアンキャラクター造形

ビビアンはステージ 4 で仲間になるが、マリオとの初対面時では敵であるマジョリン、マリリン、ビビアンの 3 名から成る「カゲ三人組」のいちばん下の弟として登場する。木の近くに落ちていたネックレスを「あんまりステキだったからついひろっちゃった」という敵役らしくも可愛らしく思

水島 翔、MIZUSHIMA Kakeru（無所属）
われる言動で、初登場時から「女性的な振る舞い」をしている描写がある。一人称は「アタイ」で、マリオたちに自分たちの素性を説明する際にも、つい「三姉妹」と口走り、その際、マジョリンからは「どこが三姉妹だよ！あんたオトコじゃないかい！！！！！！」と怒鳴られている。ビビアンの言葉づかいは、本作に登場する他の女性キャラクターと大差なく描かれており、作中ではビビアンがオトコであると他者から言及される場面は 2 度しかなく、この二者を除き、ビビアンが女性的な振る舞いをしていることを否定的に捉える者は、存在していないし、積極的に肯定する言動をとる者も存在しない（ビビアン本人を含む）。このように暗黙の了解というような形でビビアンが受け入れられているかのように物語は進み、最後までビビアンの性自認に明確な形で触れられることなく、エンディングを迎える。

3. 海外版ビビアンのキャラクター設定

本作は 2004 年当時、日本の他に 5 か国でローカライズされ発売された。ビビアンの性別にまつわる説明文は各国で異なっている。特に英語版とドイツ語版のビビアンはシスジェンダーの女性として登場しており、日本語版との差異が顕著である。フランス語版は「女の子のように見せている男の子」と日本語版にやや近い表現で説明されており、スペイン語版は「女の子のように見える男の子」と日本語版に最も近い表現で説明されている。他国の表現と最も異なるのはイタリア語版で「元々は男性だったが、今は女性であり、それを誇りに思っている」と説明され、トランスジェンダー女性であると捉えられる表現がなされている。

4. β 版ビビアンにまつわる変更点

β 版では、ビビアン本人を含めたキャラクターたちのセリフに次のような変更が加えられた。本

作では、マリオの仲間の一人であるクリスチーナが、場所や物、登場人物等について、知っていることや推察できることを教えてくれる「ものしり」というワザがあり、敵として登場したビビアンにもこのワザを使うことができる。α版での、ビビアンがオトコだと知る前のクリスチーナが「イジワルなお姉さんにいじめられる妹」と説明するセリフが、β版では「イジワルなお姉さんにいじめられる末っ子」と変更される。一見、性別に言及しない優れた改変のようにも見えるが、カゲ三人組のマジョリンとマリリンについて説明するセリフはそれぞれ「ワガママなお姉さん」「まん中のお姉さん」とα版とβ版とで変更がない。むしろ不自然に「末っ子」と表現されているように見える。

また、カゲ三人組がマリオたちに素性を明かす場面での、α版のマジョリンの「どこが三姉妹だよ！あんたオトコじゃないかい！！！！！！」というセリフは、β版では「三姉妹じゃなく三人組だっていつもいってるじゃないかい！」に変更されている。そして、それに続くビビアンのセリフは、α版の「ゴメンナサイ～ お姉さま つい…」に対し、β版では「ゴメンナサイ～ お姉さま アタイも…ココロの中では妹だから つい…」に変更されている。このように、突如として会話調のセリフの中に「ココロの中では妹」という説明調のセリフが付け足され、どこかぎこちない話し方のようにも感じられる表現となっている。

さらに物語が進み、ビビアンがマリオの仲間になる場面のセリフにも次のような変更点がある。カゲ三人組のマジョリンがなくなったバクダンをビビアンが探さなくてはならなくなり、途方に暮れているところ、マリオの方が大変な状況に陥っているにも拘らず、ビビアンを助け、慰めの言葉をかけるという場面がある。そのマリオに対するα版のビビアンの「それにあなたのやさしいキモチにアタイもこたえたいの」というセリフが、β版では「それにじつはアタイ…体はオトコのコだけどこころはカワイイオンナのコなの あなたのやさしいキモチにアタイもオトメゴゴロでこたえたいの」とこれまた会話調のセリフの中に説明調の

セリフが付け足される。β版ではここまでの場面で、登場人物の誰からもオトコであることが言及されていないのに「体はオトコ」とわざわざ自らカムアウトする形になってしまっている。

5. ジェンダーの観点におけるβ版の長所と課題

β版の良い点は、作中の登場人物が誰一人としてビビアンの体がオトコだということをアウティングしていないことが挙げられる。それ故に、誰からも「聞かれていない」のにビビアン本人が「体はオトコ」と説明してしまっており、トランスジェンダー女性体は体が男であることを他者に説明しなければならない印象を与えるような語弊のあるメッセージとなってしまっている。また、α版のビビアンは、作中で一度も自身の体のことをオトコだと説明しておらず、さらに性自認についても、ビビアン本人含め、他者や説明文での言及がない。にも拘わらず、マリオや仲間たち以外の登場人物も、ビビアンが女性的な振る舞いをするのに対し、肯定も否定もしていないため、結果としてビビアンの性自認がどうであろうと、作中の人物たちから受け入れられているという構図が完成している。無論、マジョリンがビビアンの身体性についてアウティングしていたり、「オンナのコのようでホントはオトコのコ」という身体性にのみ言及のある説明文が存在する等、問題がないとはいえない表現も所々にあるものの、ストーリー全体を通じた内容としてはβ版よりもα版の方が、多様性に寛容であるように受け取れる物語になっている。β版は、2004年当時の海外版と比較したとき、英語版やドイツ語版で、トランスジェンダー及びそれに準ずる存在がなかったことにされている点から見れば、「進歩」しているという見方もできる。しかし、LGBTQに配慮した改変をしたつもりが、実は制作者側が作中の登場人物であるビビアンに対して、性自認を断定し（「カワイイオトコのコ」という存在は、性の多様性として認められないのだろうか？）、身体性のカムアウトを強制するような場面をつくってしまい、むしろ配慮に欠く結果になってしまっているのではないだろうか。

出口としての図書館

『弱キャラ友崎くん』／『僕の心のヤバイやつ』を通じて

隣村 狸、TONARIMURANO Tanuki (MLA+研究所)

1. はじめに

本報告では物語世界から、現実の学校生活へと踏み出していく陰キャの人生の「岐路」に焦点を当てながら、マンガ・ライトノベルの青春ラブコメディに出てくる学校図書館の機能について再考する。この考察を通じて、学校図書館という場が、自らを閉ざす場ではなしに、図書を介して、他の人と出会い、繋がっていく空間であって、やがては「外」に出ていくための「修練」の場として機能することが明らかになるはずである。またこの考察は単なる表象分析にとどまらず、現実の学校図書館の在り方を問い直していくことだろう。

2. 市川京太郎における図書館

桜井のりおが手がけた『僕の心のヤバイやつ』（秋田書店）は、累計 500 万部を突破した人気コミックであり、アニメ化もされ、好評を博した。この作品は、陰キャで、中二病かつ、妄想癖があり、スクールカースト下位の主人公・市川京太郎と、陽キャで、読者モデルをしており、スクールカースト上位のヒロイン・山田杏奈とのラブコメディを主軸とする学園物語である。特に、最初は杏奈を一方向的に逆恨みし、彼女を殺す妄想までしていた京太郎が、杏奈の「実像」に触れながら、ダメなりに“真人間”になろうと、もがく姿は読者の心を打つに違いない。懐かしい、あるいは憧れの青春を仮想的に体験する物語であると同時に、“克己”の徳を間接的に示唆する展開が、本作の大きな魅力であると言ってよい。

このような物語展開において、京太郎の心理の変化を象徴する記号が学校図書館である。京太郎は当初、休み時間には読書をし、昼休みには学校図書館に通い詰めるという意味において、「子どもの読書活動の推進に関する法律」第 2 条が目指

す、「あらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行う」「理想」的な子どもである訳だが、只管クラスメートへのルサンチマンを募らせる京太郎と「健やかな成長」は程遠いものであるだろう。読書は人間の成長の必要条件ではあっても、決して十分条件ではないのである。

そして、学校図書館関係者泣かせな設定ではあるのだが、京太郎が杏奈の「実像」に触れるきっかけとなるのは、杏奈の図書室での「飲食」を書架から垣間見る“出来事”において、である。杏奈が学校図書館で「飲食」を行うのは、現在の学校図書館が必ずしも、活発に利活用されていない事実を少なからず、反映していよう。要するに、来館者が少ないから、「飲食」をしてもバレにくいという現実がなければ、皮肉なことに、京太郎と杏奈に“接点”が生じる事故は起こらなかったのである。

この事故のような出会いと、いくつかの事件が重なり、最初は京太郎が杏奈に、次第に杏奈も京太郎に関心を持っていくようになる。この両者の関係性の変化を反映する指標もまた、学校図書館なのである。杏奈は自主的に読書をするようなキャラクターではないが、京太郎に関心を持つようになってから、杏奈は学校図書館に通い、京太郎と交流を持つようになる。学校図書館はクラスメートの目を避けながら、2 人が関係を育むには、うってつけのスポットとして機能する。繰り返しのようになってしまいが、この学校図書館には、殆ど人が来ないため、秘密の、そして密な関係を築きやすい場として描かれているのである。

加えて 2 人の関係が進展した結果、京太郎の視野が広がり、今まで彼の眼には入らなかった、周囲の「実像」に気づくにつれ、学校図書館の登場頻度は減り、「学校外」の描写が増えていく。

このように京太郎の人間的成長と学校図書館の描写は深く連動しているものの、その描き方は関係者が望むような、学校図書館をよく利用する子どもが、「健やかな成長」を遂げるはずだという希望的観測ではない。むしろ「健やかな成長」を遂げるには、子どもが図書を「糧」としながらも、学校図書館の「外」において、人生経験を積むことの大切さを、この物語は示唆しているのではなかろうか。

3. 菊池風香における図書館

もう1つ陰キャと学校図書館を扱った近年のヒット作として、屋久ユウキの『弱キャラ友崎くん』を挙げてみたい。この作品はライトノベルであり、部分的にコミカライズとアニメ化がなされている。

この物語は陰キャ・スクールカースト下位ではあるが、ゲーマーとしては一流で、「弱キャラ」なりに楽しく日常を送っているとする友崎文也が、1対1のオフ会（オンラインで出逢った人がリアルで会う集まり）で、スクール上位カーストの、いわゆる完全無欠な、パーフェクト・ヒロイン、日南葵と口論になったことに始まる。葵は一流ゲーマーである文也が「人生というゲーム」から逃げていることが許せず、あたかも人生が「ゲーム」であるかのように「攻略」すべき対象であると説く。本作は葵によって設定された「リア充」を目指す課題を「クリア」しながら、文也が葵の思惑を超えて、人間的成長を遂げていくという学園物語である。

この物語はハーレム恋愛譚を含んでおり、葵が「攻略」を示唆する女性キャラクターが複数登場する。本節ではそのヒロインの1人であり、後に文也と付き合うことになる菊池風香と学校図書館との関係を取りあげてみたい。

風香は過去に仲良くなった学校司書が紹介したある作家のファンタジー小説を好む、物静かな、根っからの読書家である。ちなみに、風香が図書館好きになったきっかけは、人の目が気にならない場所だったことにありとされ、陰キャと学校図

書館との表象上の結びつきは、かくも強固である。

風香と文也との出会いは、『僕の心のヤバイやつ』がそうであったように、1つの“事故”である。というのも、文也はゲーム攻略を考えながら、学校図書館で図書を読むふりをしていたにすぎないことを、風香が勝手に文也も同じ作家のファンだと誤解したからである。

しかし、葵はこの“事故”を活かした、風香の“攻略”を文也に持ち掛け、文也は風香と例の作家を原作とする映画デートに赴く。ただ文也の、にわか仕込みの知識で、風香との会話が盛り上がるはずはない。このデートを経て、葵は文也に、風香に“告白”するよう迫るが、この他人を道具として扱うような、葵の“戦略”に疑問を感じた文也は、“ありのまま”に風香と向き合うことを決意する。花火デートを経て、風香から書店デートに誘われた文也は、これまでの自分を変える努力の過程を風香に伝え、風香から「自分の世界を変えた人」という言葉を受け取る。このように、2人は学校図書館や喫茶店で、頻繁に2人だけの会話を交わすまでの、親密な間柄になっていく。

この2人の関係が劇的に変化していくのは、風香の小説を読んだ文也が、文化祭で上演するオリジナル劇の脚本執筆を風香に依頼し、文也が監督としてその執筆をサポートする段階に入ってからである。引っ込み思案な風香が、文也の影響を受けて、自分を「変えたい」と思った結果もたらされた風香の挑戦。このやり取りの舞台は、主に学校図書館で行われるのだが、風香の心理がよく現れるのは、彼女の「脚本」の結末である。風香は、「脚本」の結末に迷う。そして、文也もまた、彼女の「脚本」の結末に考えをめぐらす。「脚本」の結末が、彼らの関係性の将来を暗示していることを、お互いに知っているからである。

「読書」ばかりに着目すると見失われがちな観点ではあるが、図書館というのは、「創作」に繋がる場でもある。その「創作」とは、直接的には「作品」であるのだが、間接的にはその「作品」に現れる人間性であったり、人生それ自体の「創造」でもあったりするのではなかろうか。

『名探偵コナン』考察

海青、MIO（無所属）

1. はじめに

本報告では、『名探偵コナン』（以下、『コナン』）がなぜ、30 年近くもの長きに渡り、人気が続いてきたのかを考えてみたい。

2. 私の人生体験と『コナン』

私が人生を歩むうえで、『コナン』は欠かせないものであった。私が中学生になったとき、小学生までの友人とクラスがバラバラになり、クラスに馴染めずに浮いてしまった。興味のないことをスルーすることが、クラスメートからの陰口や嫌がらせに繋がり、入院しても毎日お見舞いに来て、私に人間との距離感をつかませてくれた友人 1 人以外は、誰も来ないほどだった。耐えきれずに不登校になったこともあった。「図書館籠もり」から、図書委員に推薦され、本来は自分ですべき借りた図書の返却を押しつけられることもあった。

このような状況で私の心の支えとなったのが『コナン』であった。主人公工藤新一が犯人に言った言葉、「人が人を殺す理由なんて知ったことっちゃねえが、人が人を助けるのに論理的な理由なんているのかよ。」、あるいは、新一の GF 蘭が挫けそうになりながらも、たまに新一からかかってくる電話やメールを心の支えに、完全には拭えない不安とともに、新一を待つ力強い姿。

このような二人の精神的な強さは、私が授業も受けず、テストも受けないことでクラスメートから冷たい視線が飛んでこようが、自分の精神を鍛えるために始めた剣道部の活動だけは続け、仲の良い友人が悪く言われることに対し、「正義」を貫く心に繋がっていったように思う。

またクラスに馴染めない 2 人の転校生を馴染ませようと、クラス担任がクラスメート全員で協力するように仕向ける、ある謎解きの「作戦」を立てた「1 年 B 組大作戦！」に出てくる 2 人の不器用な転校生の姿は、私や友人が忘れ物をしたとき

に、声をかけられず、クラスに馴染めなかった姿と重なるところがあり、心が慰められた。

このように私の人生を支えた『コナン』であったが、私が大人になった今でも、この作品に支えられている。この作品には、安室透やベルモットという、「秘密」を抱えながら、幾つかの顔を使い分けるキャラクターが登場する。私が思春期のときにも、人にバレたら困ってしまう焦燥感を抱えながら生きていたわけだが、私は現在、職業としての配信／私生活とで「顔」を使い分ける生活を送っており、そのような場面がキャラクターの苦悩と重なり合わさることによって、気持ちが軽くなるのである。私が人生と『コナン』を重ね合わせたように、読者の中にもそのように『コナン』を受け止めた人は少なからず存在するだろう。

3. 現実世界とのリンク

第二に、『コナン』は、『こちら葛飾区亀有公園前派出所』等とは異なり、時代の流れに即して、現実世界とリンクしていく場面が多々見られる。例えば、90 年代後半のアニメ初期の頃には、ポケベルや、当時まだ普及していなかった携帯電話が、現在の作中ではスマートフォンに変化する。

このような作中での変化は緩やかに行われるが、中には「改悪」されてしまう場合もある。例として、「揺れる警視庁 1200 万人の人質」。この作中に登場する松田刑事が佐藤刑事と聞き込みをした帰りにガラケーを使い、同期であり、殉職した萩原にメールを送るシーンがある。このシーンは映画でリメイクされた際、スマートフォンに置き換えられているが、以下の理由で適切とはいえない。

というのも、現代では SNS が爆発的に普及したため、「スクショ」などで「保存」されているが、この回の放映当時はまだキャリアメールで送受信を行う時代であった。佐藤刑事は読んだメールをすぐに削除する癖があるが、殉職した松田刑

事からの、「あんたのこと割と好きだったぜ。」というメールを大切に保存する設定は、①終わりまでスクロールをしなければ読めないメールの様式、②メールを削除しないで保存しておく「ロック機能」が無ければ成り立たないのである。この点で、「現実世界とのリンク」は、読者が自然に作品を受け容れるには不可欠であるものの、作品の設定を壊してしまうような性急な改変は、読者をかえって作品から遠ざけてしまうこともあるのではないだろうか。

4. 声優を「推す」ファンの存在

第三に、声優を「推す」ファンの存在がある。このファンの存在の重要性を説明するには、劇場版の作風と興行収入の変化に着目する必要がある。

第 1 期の 90 年代は、アニメ放映直後の初期であり、興行収入はまだ 30 億円を下回っている。次の第 2 期の 00 年代は、コナンの正体がバレそうになる、周辺のキャラクターに焦点を当てた内容が増え、興行収入は 30 億円前後が多い。第 3 期の 10 年代前半になると、「漆黒の追跡者（チェイサー）」を皮切りに、「黒の組織」をテーマとした作品が登場し始めるとともに、日本サッカー協会や海上自衛隊・海上保安庁など実在の組織・団体との協力が盛んになり、興行収入が 30～40 億円と劇的に向上する。そして、第 4 期の 10 年代後半以降は、「黒の組織」が関与した作品とそうではない作品が交互に制作されるようになるとともに、著名な声優が起用された赤井秀一や安室透などの FBI・公安警察のキャラクターを主役級にすえた映画が制作されるようになってから、興行収入は 60～100 億円台に伸びた。

この第 4 期において、声優に対するファン活動の重要性が増している。この活動はいわゆる「推し活」と呼ばれ、キャラクターを含め、特定の声優を推すことである。この「推し活」は SNS でファン同士の繋がりが増えたことで発展したが、キャラクター声優に対する考え方や好みの程度をめぐって、議論が絶えないという問題を抱えている。特に自己満足感や優越感を伴って、自身の解

釈を「押しつけ」る一部の同担拒否と「共感」をもとに繋がる同担歓迎との摩擦は決して少なくはなく、誹謗中傷に至ることもある。

例えば、不祥事を起こして『コナン』から降板した声優をめくり、SNS 上で大炎上が発生した。作品への思いが真摯に綴られていることも多い一方で、「コナンという作品を傷付けた！」「アニメのセリフを使うなんて最低！」「などの批判の声と、「コナンには安室さんが必要だから、降板して欲しくなかった。」「安室透というキャラを消してしまったら赤井さんとの確執がなくなる。」「ストーリーが崩れる！」などの意見がぶつかった 1)。

5. キッズ・ファミリー世代というカテゴリー

第四に、制作側は当初より配慮を重ねていたものの 2)、「教育によくない描写」との声がネットに散見され 3)、「殺人事件」と銘打ったタイトルや殺害場面などの激しい描写が 90 年代初期よりも少なくなったように思われる。このような「配慮」により、Hulu などの配信サイトのカテゴリーにおいても、『コナン』は「キッズ、ファミリー」に分類されるに至り、視聴者層が拡大したと考えられる。

注（記事の最終閲覧日は 2024 年 9 月 30 日）

1) 一例として、河村鳴紘「人気声優の不倫・降板 男女で割れるアニメファンの意見」<https://news.yahoo.co.jp/expert/articles/3d2a7e38302488e93058c72ff83291df0258b8f1>

2) 「【アニメ名探偵コナン】伝説の恐怖回「図書館殺人事件」！津川館長の魅力を初代プロデューサー諏訪通彦が語る！#4」https://www.youtube.com/watch?v=_E3XqSn1m-A。

3) ネット上の声の一例として、<https://kuminbobl.org.com/blog/kureyonsinchan>

謝辞：口述筆記を行い、助言を受けた隣村狸に感謝する。